

人格の偉大性に関する心理学的研究

—（その1）特に、児童による偉大性要因の分析—

藤 田 主 一

I. はじめに

人の個性 (individuality) を表わす心理学的な概念は多様である。中でも人の性質に関係する概念には、気質 (temperament)、性格 (character)、人格 (personality) などがあり、それぞれの概念は独自の基準と領域とをもっている。Allport, G. W. は「人格とは、個人の特徴的な行動や思考を決定づける個人内のダイナミックな精神身体的なシステムである」と定義している。ここでいう「ダイナミック」とは「力動的」ということであり、また「精神身体的システム」とは個人に内在しているさまざまな組織や体制のことで、それらは相互にかかわり合い、決して切り離すことができない体系である。「人格」は個人の背後にある一貫した行動様式を総合的に示している概念である。人が日常生活の中で他者の個性を認知し、また他者との人間関係をスムーズに遂行していく上で欠かせないのは、個人がもっている人格（個人の全体像であり、特定の性格のように価値基準のみで形成されている狭義の概念とは異なる）の的確な把握であろう。

本研究では、人格研究の中で、特に『人格の偉大性』を構成している要因を明らかにすることを目的にしている。『偉大性』という概念は、通常「偉い人」や「立派な人」などと呼ばれる人を構成する要因を指すものである。しかし、私たちが他者を「偉大な人である」とか「立派な人である」と認識する基準はどこにあるのだろうか。ある人は「艱難辛苦を乗り越えて立派な業績をあげた人」を思い浮かべるだろうし、他の人は「良識のリーダーシップを発揮して国家国民を治めた人」や「弱者を思いやる気持ちがある人」を持ち出すだろう。事実、広辞苑（岩波書店）で『偉人』や『偉い』を引いてみると「偉人＝偉大な人、すぐれた人、大人物」、「偉い（人）＝すぐれている（人）、人に尊敬されるべき立場にある（人）」と解釈されている。また、「非常に立派な仕事をした人」「すぐれた能力、性格などを備え、偉大な業績を成し遂げた人」「世のためになるような立派な仕事を成し遂げた人」といった解釈を採用している辞典もある。もちろん、『偉大性』の心理学的な構造と一般的認識との間に、どのような差異が存在するのかは十分にわ

かっている。

II. 「人格の偉大性」研究の意義

高嶋（1997）は、著書『偉人・天才の心理学』の中の『偉大性要因とその評価』の章において、「偉大性とは何か」について次のように記述している。

—偉大性とは何かについては、今日、心理学でも客観的に明らかにされていない。なぜならば、余りにも漠然とした言葉であり、しかも、「偉大」とは量的なものか、それとも質的なものか、また、なにを基準としているのかなど多くの問題が横たわっているからである。古くは“genius”の研究に、天才人や優秀児の特性などが統計的に扱われていたが、しかし、偉人天才を中心にした“greatness”に関するものではなかった。

ゴールトン、ターマン、コックス、キャテル、ホーリングウォースなどは、もっぱら、この種の研究に努力を傾けはしたが、そのいずれもが数量的研究によるものであった。もちろん、客観的に実態の把握には統計的操作は基礎として要求されなければならないからである。事実、人間の偉大さを客観的にとらえ、これを評価することは困難なことである。客観基準をどこにおくか、なにをもって「偉大」と決めるかが問題である。

過去における偉人天才といえども、かれらが遭遇した時代や社会の変化、あるいは個人の生活環境によって、いろいろな様相を示すからである。今までに出版された偉人天才に関する多くの文献の中には、“eminence”や“gifted”, “superior” という用語がしばしば出現しているが、“greatness” という用語は出ていない—

ところで、1988年に日本青少年研究所が日本・アメリカ・中国の高校生に調査した「尊敬する人」と「その理由」の結果を見ると、『偉大性』と関連して面白い事実が浮き彫りになった。

まず当時の「尊敬する人」は、日本では父親（6.4%）を筆頭に、母親、坂本竜馬などの順、アメリカでは父親（2.8%）を筆頭に、マイケル・ジョーダン、両親、キング牧師などの順であるのに対して、中国では周恩来（33.2%）を筆頭に、鄧小平、魯迅、毛沢東などの順となる。おそらく、日本の高校生が意識する「尊敬する人の特徴」は、「活動的、意志が強く自制的、他人を思いやる」ところに重きを置き、アメリカでは「知的、成功、活動的」なところ、中国では「活動的、知的、良いリーダー」といえる。

つまり、身近な人を除くと、日本人は「娯楽性、話題性」のある人を重視し、アメリカ人は「強さ、努力、成功」の人、中国人は「国や社会への貢献」の人を対象としていることが理解できる。ここで、かつて筆者らがまとめた『偉大性』に関する調査研究の結果を紹介しよう。

III. 「人格の偉大性」に関する調査研究 I

藤田・高嶋 (1993a, 1993b) は、宮崎県および香川県内の小学校児童 773名 (5年生男子265名, 女子263名; 6年生男子114名, 女子131名) に対して、予備調査の結果から、以下の5項目についての質問票を作成した。

(1) 尊敬する人を次の中から3人選んで順位をつける。

父, 母, 祖父母, 兄姉, 教師, 友達, 野口英世, 西郷隆盛, 坂本竜馬, 二宮金次郎, エジソン, コロンブス, ファーブル, 徳川家康, ナイチンゲール, ヘレンケラー, キュリー夫人, モーツァルト, ベートーベン, ジョン万次郎, フランシスコ・ザビエル, リンカーン, ナポレオン, 織田信長, 福沢諭吉, 毛利衛。

(2) 尊敬する理由を次の中から3つ選んで順位をつける。

やさしい, 頭がよい, 明るく楽しい, 仕事に熱心である, 何でもできる, 人のためになる, 立派な仕事をした, 地位が高い, すぐれた技術をもつ, 何でも知っている, 発明・発見をした, 多くの人に知られている, きびしい, すぐれた指導者, 理解してくれる, すぐれた政治家, 頼れる, 困っている人を救う, 努力家である, 立派な研究をした。

(3) 「偉いと思う人」を何人でも自由に書かせる。

(4) 「偉いと思うその人」の理由を書かせる。

(5) 偉人伝の読書経験と、誰の偉人伝かを書かせる。

1. 「尊敬する人」と「偉い人」との関係について

まず、「尊敬する人」について選択された人物の順位に点数を与えて重みづけ (1位に5点, 2位に3点, 3位に1点) をし, 5年生と6年生の男女ごとの結果を算出した。さらに学年を相殺して選択比率を求めると, 男子では①父16.6%, ②母14.7%, ③エジソン8.4%, ④坂本竜馬6.8%, ⑤祖父母5.8%などの順, 女子では①母18.9%, ②父17.4%, ③祖父母9.0%, ④ヘレンケラー8.2%, ⑤ナイチンゲール8.0%などの順になった。

男子も女子も身の回りにいる人, 特に父や母を「尊敬する人」に選ぶ割合が高い。身近な人以外では, 男子は歴史上の科学者や政治家を, 女子では各分野の女性や音楽家を選んでいる。過去のデータでは男子に母親を選択する低さが見られるが, ここでの結果から家庭において母親の存在が大きな位置を占めていることがわかる。

さて, 自由記述による「偉い人」の種類は, 男子では5年生58人, 6年生48人, 女子では5年生42人, 6年生30人であった。表1は, 記述された人物を選択率からまとめた結果である。この中には内外の政治家や著名なスポーツ選手も登場し, 小学校高学年にもなると社会の動きに敏感

であるといえよう。

表1 「尊敬する人」と「偉い人」との比較

順位	男 子		女 子	
	尊敬する人	偉い人	尊敬する人	偉い人
1	父	父	母	母
2	母	母	父	父
3	エジソン	エジソン	祖父母	ヘレンケラー
4	坂本竜馬	野口英世	ヘレンケラー	ナイチンゲール
5	祖父母	祖父母	ナイチンゲール	祖父母
6	野口英世	毛利 衛	友達	教師
7	友達	友達	ベートーベン	友達
8	毛利 衛	坂本竜馬	野口英世	ベートーベン
9	教師	ファーブル	兄姉	野口英世
10	織田信長	福沢諭吉	モーツァルト	モーツァルト
11	西郷隆盛	リンカーン	リンカーン	毛利 衛
12	ファーブル	教師	教師	エジソン
13	福沢諭吉	西郷隆盛	エジソン	リンカーン
14	リンカーン	キュリー夫人	毛利 衛	福沢諭吉
15	徳川家康	天皇陛下	キュリー夫人	医師

2. 「尊敬する理由」と「偉いと思う理由」との比較

「尊敬する理由」については、あらかじめ20種類の回答を用意して順序づけた。前記と同じ重みづけを与えた結果を、学年と性別ごとに分けて表2に示した。

学年を相殺して性別でまとめると、男子では、①やさしい14.1%、②仕事に熱心である12.0%、③人のためになる11.2%、④明るく楽しい9.9%、⑤努力家である7.9%などの順、女子では、①やさしい15.0%、②人のためになる12.0%、③明るく楽しい10.9%、④努力家である10.7%、⑤仕事に熱心である10.3%などの順である。「やさしさ」を第1位にあげているのは共通しているが、全体的に見ると、男子が発明や業績を重んじるのに対し、女子は人格や人徳を重んじていることが理解できる。

表3は、自由記述による「偉いと思う理由」についての結果である。すべての記述内容を表中の①～⑩の項目で分類した。男子では、⑤業績15.9%、③行動13.6%、①努力12.0%、⑦発明発見11.6%などの順、女子では、①努力22.9%、②性格17.0%、③行動13.0%、④奉仕12.8%などとなり、ここでも男子が「業績」を、女子が「努力や性格」を重視する。反対に、男女とも社会的「名声」を認識する割合の低いことがわかる。

3. 「偉人伝」の読書経験について

表4に示したように、男子の71.7%、女子の76.9%が何らかの「偉人伝」を読んだ経験をもっている。取り上げられた「偉人伝」の数は、5年生男子44、5年生女子60、6年生男子51、6年

表2 学年別の男子と女子における「尊敬する理由」についての比較

順位	男 子		女 子	
	5 年 生	6 年 生	5 年 生	6 年 生
1	やさしい	人のためになる	やさしい	努力家である
2	明るく楽しい	仕事に熱心である	仕事に熱心である	明るく楽しい
3	仕事に熱心である	やさしい	人のためになる	人のためになる
4	人のためになる	努力家である	明るく楽しい	やさしい
5	頭がよい	立派な研究をした	努力家である	困っている人を救う
6	努力家である	立派な仕事をした	困っている人を救う	仕事に熱心である
7	何でもできる	発明・発見をした	頭がよい	何でも知っている
8	発明・発見をした	明るく楽しい	頼れる	頼れる
9	立派な研究をした	すぐれた指導者	何でもできる	何でもできる
10	困っている人を救う	困っている人を救う	理解してくれる	頭がよい
11	立派な仕事をした	何でもできる	発明・発見をした	多くの人に知られている
12	きびしい	頭がよい	何でも知っている	立派な仕事をした
13	多くの人に知られている	多くの人に知られている	きびしい	理解してくれる
14	何でも知っている	何でも知っている	立派な仕事をした	すぐれた技術をもつ
15	理解してくれる	頼れる	多くの人に知られている	立派な研究をした
16	頼れる	理解してくれる	すぐれた技術をもつ	発明・発見をした
17	すぐれた技術をもつ	きびしい	立派な仕事をした	すぐれた指導者
18	地位が高い	すぐれた技術をもつ	すぐれた指導者	きびしい
19	すぐれた指導者	地位が高い	すぐれた政治家	すぐれた政治家
20	すぐれた政治家	すぐれた政治家	地位が高い	地位が高い

表3 「偉いと思う理由」の比較 (%)

項 目	男 子	女 子	全 体
① 努 力	12.0	22.9	18.5
② 性 格	9.7	17.0	14.0
③ 行 動	13.6	13.0	13.2
④ 奉 仕	11.2	12.8	12.1
⑤ 業 績	15.9	8.0	11.2
⑥ 救 済	7.4	9.6	8.7
⑦ 発明発見	11.6	4.8	7.6
⑧ 知 能	8.1	4.5	6.0
⑨ 名 声	5.4	2.1	3.5
⑩ その他	5.1	5.3	5.2

生女子42にのぼった。男子の第1位はエジソン、女子の第1位はヘレンケラーである。

「尊敬する人」「偉い人」と「偉人伝」との関係を見ると、上記の2人は不動だが、たとえば福沢諭吉は伝記では14位、西郷隆盛は18位である。

このような資料から、普遍的な人物像と時代に敏感な人物像が浮かび上がってくる。父親と母親の登場は、生活環境との関係で身近な実像といえるのであろう。

表4 「偉人伝」の読書経験 (%)

性別	学年	ある	ない
男子	5年生	68.2	31.8
	6年生	78.1	21.9
	全体	71.1	28.9
女子	5年生	74.9	25.1
	6年生	80.9	19.1
	全体	76.9	23.1
全体		74.0	26.0

IV 「人格の偉大性」に関する調査研究II

1. 「人格の偉大性」の因子構造仮説

藤田・高嶋(1996)は、『人格の偉大性』を問題にする場合の基準について、上記の諸研究を参考にしながら検討をすすめた。まず、予備調査として大学生男女144名から『偉大な人』または『偉い人』をさす場合、何を基準としているのかを自由記述に基づいて収集したところ、個人間の差はあったが合計537記述が得られた。それらを類似性の高いものでまとめると140項目に分類できた。さらに項目間を5つの観点で分類が可能だった。ここで、仮説的ではあるが、『人格の偉大性』を構成している5因子(BASIC)理論を想定した。すなわち、

- (1) 行動の基準と努力……………「達成行動の強さ」因子…………… Behavior
- (2) 仕事や業績……………「知名度と高業績」因子…………… Achievement
- (3) 社会や家族への貢献……………「社会活動の貢献」因子…………… Social contribution
- (4) 知的能力の高さ……………「知的能力の高さ」因子…………… Intelligence
- (5) 性格や人柄……………「性格や良い人柄」因子…………… Character

の5因子(人格構造)である。

ところが、「偉い人」に登場する人物が、上記の仮説的5因子と必ずしもリンクしないことが明らかになった。たとえば、エジソン個人は偉大であるが、発明や発見をすることだけが『人格の偉大性』の十分な要因とはならないのである。

2. 「偉いね」体験の具体像

藤田・高嶋(1998)は、埼玉県内の小学校児童530名(5年生男子120名、女子125名;6年生男子149名、女子136名)を対象に、以下に示す「偉いね」体験の具体像を求める自由記述形式の質問票を作成した。

- ・調査材料：私たちは、よく、「あの人は偉い人ですね」と言うことがあります。あなたが

誰かから「偉いね」と言われたことを、1つ思い浮かべてください。

①それは、どういうことでしたか？

②その時、あなたはどんな気持ちになりましたか？

・手続き：調査は、担任教師が教室単位で実施した。

(1) 小学生による「偉いね」体験の分類

小学校5年生、6年生の児童530名が記述した「偉いね」体験の具体像（内容）を、想定した「BASIC」仮説のどの因子に相当するかを分類した。表5はその結果をまとめたものである。

(1) 各学年別、男女別でも「社会活動の貢献（S）」が顕著に高率であるが、学年差および性差は見られなかった（表6）。

表5 小学生による「偉いね」体験の分類 (頻度, %)

因子構造	5年生			6年生		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
達成行動の強さ (B)	14 (11.7)	15 (12.0)	29 (11.8)	22 (14.8)	23 (16.9)	45 (15.8)
知名度と高業績 (A)	20 (16.7)	6 (4.8)	26 (10.6)	12 (8.0)	6 (4.4)	18 (6.3)
社会活動の貢献 (S)	85 (70.8)	100 (80.0)	185 (75.5)	104 (69.8)	98 (72.1)	202 (70.9)
知的能力の高さ (I)	0	0	0	0	0	0
性格や良い人柄 (C)	1 (0.8)	4 (3.2)	5 (2.1)	11 (7.4)	9 (6.6)	20 (7.0)

表6 小学生による「偉いね」体験の分類 (%)

因子構造	5年生			6年生			有意差の検定				
	男①子	女②子	全③体	男④子	女⑤子	全⑥体	①×②	④×⑤	①×④	②×⑤	③×⑥
達成行動の強さ (B)	11.7	12.0	11.8	14.8	16.9	15.8	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
知名度と高業績 (A)	16.7	4.8	10.6	8.0	4.4	6.3	**	n. s.	*	n. s.	n. s.
社会活動の貢献 (S)	70.8	80.0	75.5	69.8	72.1	70.9	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
知的能力の高さ (I)	0	0	0	0	0	0	—	—	—	—	—
性格や良い人柄 (C)	0.8	3.2	2.1	7.4	6.6	7.0	n. s.	n. s.	**	n. s.	**

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

(2) 「社会活動の貢献（S）」因子に含まれる内容を、さらに3分類することを試みた。その結果、“親や家事の手伝い”などに対して「偉いね」と言われることが多く（5年生63.8%、6年生73.8%）、男子では5年生（54.1%）<6年生（76.0%）へ向かい急増している。次に、“他者への世話や援助”（5年生27.0%、6年生17.8%）が続いている。

- (3) 「達成行動の強さ (B)」因子は，“自主勉強”“努力”“チャレンジ”などへの評価である。学年差および性差は見られない。
- (4) 「知名度と高業績 (A)」因子は，“100点”“賞”“成績”などに顕著な結果を示した場合への評価である。5年生に性差（男子>女子），男子に学年差（5年生>6年生）が見られた。
- (5) 「性格や良い人柄 (C)」因子は，“礼儀正しい”“気がつく”などへの評価である。男子に学年差（5年生<6年生），全体に学年差（5年生<6年生）が認められた。
- (6) 「知的能力の高さ (I)」因子に関して，「偉いね」体験をした例は，どの学年にも皆無であった。
- (7) 「偉いね」体験を受けた場所は，学校よりも家庭の方に多く見られた。

(2) 「偉いね」体験による感情表出の分類

「偉いね」体験を通して得られる感情（気持ち）を分類した。表7はその結果をまとめたものである。分類には，「喜び」「疑問・否定」「冷静」「進取」の4種類を取り上げた。

表7 「偉いね」体験による感情表出の分類 (頻度，%)

感情の表出	5年生			6年生		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
喜び (うれしい，よい気分，など)	104 (86.7)	99 (79.2)	203 (82.8)	116 (77.8)	99 (72.8)	215 (75.4)
疑問・否定 (当たり前だ，偉いと思わない，など)	7 (5.8)	10 (8.0)	17 (7.0)	12 (8.1)	21 (15.5)	33 (11.6)
冷静 (よいことをしたんだ，など)	3 (2.5)	9 (7.2)	12 (4.9)	15 (10.1)	12 (8.8)	27 (9.5)
進取 (またしよう，もっと頑張ろう，など)	6 (5.0)	7 (5.6)	13 (5.3)	6 (4.0)	4 (2.9)	10 (3.5)

- (1) 各学年，男女別を問わず，圧倒的に「喜び」の感情が表出される（5年生全体82.8%，6年生全体75.4%）。これは，“うれしい”“よい気分”の2種類に分かれるが，前者（うれしい，うれしかった）の方が高率である。
- (2) 小学生は，「偉いね」体験を受けると素直に喜びを表出するが，さらに頑張って再度の評価を得たいとも感じている。「進取」の感情であろう。
- (3) 高学年に向かうにしたがって，「疑問・否定」（当たり前のことをしたままだ，べつに偉いとは思わない，など）の感情（5年生全体7.0%→6年生全体11.6%）や，「冷静」（自分はよいことをしたんだと思った，など）の感情（5年生全体4.9%→6年生全体9.5%）が高まる傾向がある。「偉いね」体験でほめられた内容に疑問をもち，当たり前と感じている行動を周囲が強調する意味を，冷静に判断しようとする傾向と思われる，ことさら興味深

い結果である。自己の行動を客体化しているものといえよう。

3. 要約

以上の諸結果から、小学生を対象にした「偉いね」体験の具体像は次のように要約される。

- (1) 小学校5年生、6年生による「偉いね」体験は、『人格の偉大性』に関する「BASIC」仮説のなかで、「社会活動の貢献（S）」に相当する内容が多い。
- (2) 「社会活動の貢献（S）」は、他者との関係のうえに成立するため、その行動は他者（多くは親）に満足が得られることが前提であり、それが評価の対象となる。
- (3) 「知名度と高業績（A）」は、とくに業績（成績、賞など）が認められる場合に評価され、その維持向上のために「達成行動の強さ（B）」が求められる。
- (4) 「知的能力の高さ（I）」は、単なる知的個人差が評価されないことを物語っている。
- (5) 「偉いね」体験によって表出される感情は、“うれしい”に代表される「喜び」がもっとも多いが、学年とともに、評価に「疑問・否定」を表出する傾向がある。

<引用文献>

- 1) 藤田主一・高嶋正士：「児童・生徒による偉人像の方向について」。1993，日本性格心理学会第2回大会発表論文集。
- 2) 藤田主一・高嶋正士：「小学生からみた現代の偉人像」。1993，日本応用心理学会第60回大会発表論文集。
- 3) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因について」。1996，日本応用心理学会第63回大会発表論文集。
- 4) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてII」。1997，日本応用心理学会第64回大会発表論文集。
- 5) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてIII」。1998，日本応用心理学会第65回大会発表論文集。
- 6) 高嶋正士：「偉人・天才の心理学」。1997，医学出版社。